



**株式会社アドバネット**

## CPUボードからI/Oボードまで、幅広い製品ラインナップでシェアを拡大する

株式会社アドバネット 代表取締役社長 **田中一義**氏に聞く

1981年の創立以来、「EMS（Electronic Manufacturing Service）カンパニー」として活躍している株式会社アドバネット。同社は、ボード業界においても不動の地位を保っている。「製造業、空洞化の時代」といわれる現在でも、業績の伸びは衰えていないという同社の強みは「提案型企業」として企画・設計から製造・品質保証に至るまでの工程を一貫して行える体制をグループ内に確立していることによって、製品の精度と信頼を上げることができ、競争を勝ち取ることができたという。

今回は、株式会社アドバネットの代表取締役社長である田中一義氏に、同社の「強さ」の秘訣について伺いました。

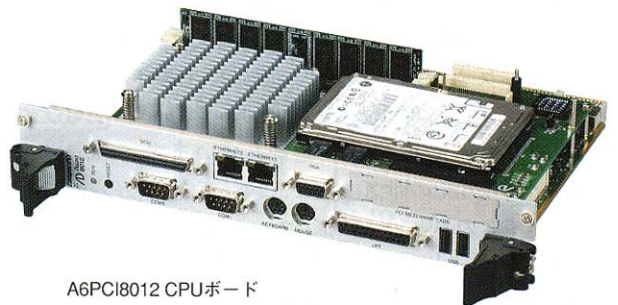
### ■グループ企業化するメリット---製造業が生き残るために縮小と拡大が自在にできる

編集部：現在、同社はグループ企業化しているということですが、各社の役割についてお願いします。

田中社長：グループ全体は、同社をコアとした組織となっており、1996年に分離独立した（株）バンテックと（株）スピリット21、2001年設立の（株）ムービングアイ、2003年に設立した（株）アドバネットR&Dの5社があります。それぞれの守備範囲としては、コアとなる同社が、営業企画および設計・開発をしています。製造部門を担う会社として、バンテックが量産を、スピリット21が試作を担当しています。また、昨年に発足したアドバネットR&Dは、弊社の取引先が関東に集約していることもあり、東京を中心とした関東への足がかりとし、顧客満足度「CS」の向上を目的としたカスタマ・サポートを主体に、開発も東京で行うべく進めています。現在は、設計者が2名とカスタマ・サポートが1名ですが、今後、増員をはかっていく予定です。最後に、ムービングアイは同社を含めた4社が出資をしています。360度の視角が映せる魚眼カメラを使ったシステムを構築しており、現在はある制御装置のプロジェクトに参画しています。

編集部：グループ企業化には、どのような目的があるのでしょうか。

田中社長：日本の製造業は、空洞化の時代などといわれていますが、製造業というのは産業の基盤として、成長しつづけると考えています。企業をグループ化することによ



A6PCI8012 CPUボード

て、縮小と拡大が自在にできるというメリットが生まれます。分社化することによって、各社は健全経営ができると考えています。

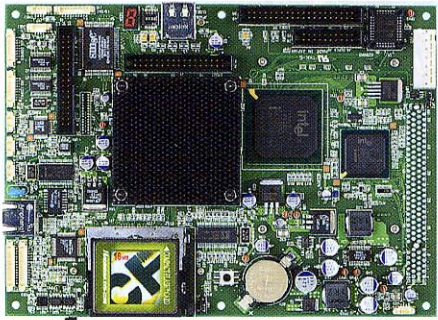
### ■本来の姿のEMSカンパニーとは---開発設計、資材調達、製造と品質検査まで請け負う

編集部：会社設立時から、一貫して国内生産に重点を置かれています。ボード業界では、海外からの製品輸入が多いなか、国産化のメリットはどのようなのでしょうか。

田中社長：当社では、カタログ、広告媒体、ホームページにおいて、5~6年前から「EMSカンパニー」という表現を使っています。国産ボード・サプライヤのなかでは、最初にこの名称を採用しました。なぜ「EMSカンパニー」かということ、我々はまさに「EMS」だからです。お客様の仕様に対して、開発設計から資材調達および製造、品質保証までを一貫して行って、製品を供給するというのが「EMS」の流れです。グループとして、製造ラインをもち、品質保証も行っているという流れの中で、製品に不具合が発生した場合に、どのようにお客様に満足の行く対応・解析を行うことができるかという点です。そこに、我々がグループとして開発設計部隊及び生産ライン部隊の全工程をもっているからできるのであって、ひいてはお客様に安心して製品を使っただけということにつながっています。

### ■CPUボードの開発により売り上げが急伸---標準品の売り上げ50%が目標

編集部：東京進出の戦略の一つとして、標準品のシェア拡大ということがあるとお聞きしましたが、現在、標準品と



ULV Celeron CPUボード Adbc8015

カスタマイズ品の割合はどれくらいで推移しているのでしょうか。

**田中社長：**当初は、OEMメーカーとしてビジネス展開をしていましたが、東京に進出して、まずI/Oボード、5~6年前からCPUボードをラインナップに加えるようになってからのシェア占有率は、かなり追い風が吹いてきたと実感しています。今期の売り上げベースで、標準品は当初の目標に達していませんが、次期には、売り上げ50%に引き上げたいと考えています。CPUボードに関しては、競合他社とくらべると後発です。

当社は、I/Oボードは豊富だがCPUボードはなかった時期は、現在に比べ小さかったというのが実情です。CPUボードを発表できなかったのは、体制が整っていなかったからです。CPUボードを扱うということは、必ずOSが介在します。OSをサポートするには、デバイス・ドライバを記述できる技術者、ソフトウェアに関する技術者の存在が絶対の条件となります。そこで、技術者育成を最優先に考えて投資を行い、5~6年前にその体制と条件が整いCPUボードの開発に着手し、売り上げが急激に伸び始めてきて、現在では、CPUボード&I/Oボードの両方が好調ということでした。結果として、当社の製品ラインナップで一つの制御装置システムを構築できる環境を提供できるようになったわけです。

実際、ボード・ベンダというのは、つねに半導体メーカーに振り回されているというのが実情です。メーカーがCPUを開発する以上、ボードを作り続けなくてはなりません。だから、ボードの種類が増えてしまう。CPUボードを作り続ける中で、お客様のニーズに100%合致すれば、標準品として採用される可能性もでてきます。そこから、カスタマイズ展開も図りたいと考えています。標準品は、評価していただくための入り口です。今後も、製品提案を続けたいとお客様が注目してくれないと考えています。現在の開発製品は「Pentium M」と「ULV Celeron」で、春にはご提供できる予定です。

## ■標準バス規格の動向には注意を払うが、バス規格のリーダーシップは取らない

**編集部：**標準バス規格の動向に関心を持たれ、自ら米国のカンファレンスに参加されたとのことですが、どのように進みそうですか。

**田中社長：**当社としても、バス規格がどちらの方向へ行くのか、業界の動向を先取りしなければならないと言う事でPICMGとVITAのカンファレンスに参加して来ました。VMEやCompactPCIの他、AdvancedTCAやそれに関連するAMCなどの新しい規格の発表やデモなどに興味をもちました。また、PCIExpressやRapidIOと言う新しい技術も現実のものとなりつつある事を実感しました。いままではバスという考え方でしたが、これからはファブリックという考え方になるであろうと思いました。

米国では、イラク戦争の影響で軍需を中心にVMEの売り上げがかなり伸びている様です。今後もこの分野ではVMEが使われて行くのだろうと考えます。日本における状況は多少違いますが、新しい分野には新しい技術が使われて行くと思われれます。新しい分野の成長度合いは未知数ですが、我々が成長して行く為には既存の分野だけではなく新しい分野に積極的に拡張して行きたいと考えています。その為には、新しい技術を採用した新しい規格に適合する製品をどんどん開発して行く予定です。

**編集部：**企業としては、将来どのようなポジションを目指していらっしゃるのでしょうか。

**田中社長：**我々は製造業ですから、製造業として常に品質の高いものの提供と顧客満足度を得るために必要なことを常に考え行動することだと考えています。「クレーム・ファースト」をスローガンに「不良率ゼロ」を目指していくと考えています。更に環境問題に絡み「鉛フリー」への対応も2005年を目標に設備の改善・導入に取り組んでいます。社内的には、正確に迅速に、それとチャレンジ精神を忘れないということを提唱しています。



本社

### 株式会社アドバネット

〒700-0971 岡山県岡山市野田3-20-8

〒101-0048 東京都千代田区神田多町2-2 ハヤカワNo.3ビル3F

TEL 086-245-2861 FAX 086-245-2860

TEL 03-5294-1731 FAX 03-5294-1731